

岡映研究会

「北原泰作の部落解放理論」

6月3日、倉敷市古城池高校の菅木一成さんが、表記の演題で、報告してくださいました。その報告内容は、北原の部落論を①戦後～1950年、②1957～1962年、③1967～1973年の三つの時期に分け、その間一貫するもの、変化するものとの二つに分けて報告するというものでした。

そしてその末尾に、「岡と北原」と題して、岡の荊冠記に散見される北原論が収録されていました。その中には「北原は訪中の時の行状は芳しくなかった。」とか「朝田一派の先兵」などといった辛口の評語が認められます。むろん全体としてその間に「親交」関係が続くことは明記されているのですが。

そうした報告に触発されてのことでもないでしょうが、とくに①の北原の日本資本主義の理解は、講座派のようでもあり労農派のようでもあるといった理論的な不透明さを免れていないといった意見が出されました。北原氏という人は、アカデミックな素養がなく、反面、文学者的な感覚的把握に優れており、そのことが部落運動の中で強みにも弱みになったのではないかといった意見も出されました。

「現在」研究会

人類社会の持続の条件——「エコロジカル・フットプリント値」が「生態系能力」の範囲内であること——と題して、日本科学者会議の白井浩子さんに、報告していただきました。「持続可能な社会」とはどんな社会なのか、その条件は何かを明らかにしようとするものです。白井さんによれば、

「エコロジカル・フットプリント計算」(EF計算)の概念は、個人レベルでの生活スタイルから国家の基本政策、CO₂排出量の国際的合意の公平な基準を提供するものとして考え出されたものです。

「生態系全体の基盤」は「植物の光合成(有機物形成)に依存」しており、それは「日の当たる場所でこそ可能」で、「広さ1グローバルヘクタールの森は1450リットルのガソリン燃焼による生成CO₂を吸収する」生態系能力を持つと計算されています。それに対して、「人間の総活動量(消費)」は、「光合成」の成果を食いつぶしていくことを意味します。それを「日の当たる場所を足が踏みつけ日光を遮る」行為による「踏みつけ面積」として捉まえ、「エコロジカル・フットプリント」(生態学的足跡)と命名されたということです。

こうして、「EF計算」による、「生態系能力」>「人間の総活動量(消費)」が、「持続可能な社会」の絶対的条件となるわけです。現在の地球上の生態系能力の総量は112億 gha で、世界の総人口で総量を割ると、1人当たりの配分量は1.8 gha となり、それが、現状維持の水準となります。そこには、アメリカ=9.6、日本=4.4から、ソマリア=0.8、アフガニスタン=0.1というように、大きな格差状況があり、それゆえ、「先進国の経済活動の抑制が不可欠」になります。

以上の報告について、EF計算の根拠と方法、資本主義経済の克服が不可欠なのか、それとも枠内で可能なのか、などなど活発な質疑が行われました。また、「成熟社会」論(「ゼロ成長社会」論)との関連なども話題となりました。(小畑)